

倉橋惣三への一つの接近(その二)

——「たけくらべ論」に見られる「子ども観」の多層性——

本田 和子

(2) 「美登利」の女性像

「解かば足にもとよくべき髪を、根あがりに堅くつめて前髪大きく鬚もたげの、赭熊といふ名は恐ろしけれど、これを此頃の流行とて良家の令嬢も遊ばさるゝぞかし、色白に鼻筋とほりて、口もと小さからねど縮りたれば醜からず、一つ一つに取たてゝは美人の鑑に遠けれど、物いふ声の細く清しき、人を見る目の愛敬あふれて、身のこなしの活々したるは快きものなり、柿色に蝶鳥を染めたる大形の浴衣きて、黒繻子と染分絞りの昼夜帯胸だかに、足にはぬり木履こゝらあたりにも多くは見かけぬ高きをはきて、朝湯の帰りに頸筋白々と手拭さげたる立姿を、今三年の後に

見たしと廓がへりの若者は申しき^{(*)1}」

女主人公「美登利」の物語世界への登場は、右のような文章で始まっていた。年齢は、数え年の一四歳、「育英舎」という私立の学校へ通う少女である。「大黒屋の美登利とて生国は^{(*)2}紀州」と紹介が続くが、「大黒屋」とは、新吉原の伎楼という設定であった。そこで、彼女の姉が、遊女として「お職を張って」いるのである。姉が身売りの時、目きゝにきた楼主にすゝめられて両親共々上京し、「大音寺前」の住人となったのだった。

「姉なる人が全盛の^{(*)3}余波」で、常に小使い銭には不自由せず、また、楼の主や廓関係の人々が大切に甘やかすこともあって、彼女は、持ち前の気っ風のよさと負けん気を遺憾なく発揮し、いままや、押しも押されぬ^{(*)4}「子供仲間の女王様」である。例え

ば、同級の女生徒二十人に、揃いのゴム鞆を買ってやったり、筆屋の店頭で売れ残った玩具を全部買い占めたり、その派手な振舞いは、「末は何となる身ぞ」と、秘かに見る人を案じさせるほどであった。

然し、美登利の行く末は、案じる余地もなく、既に、定まってお見やる。「みどり」というその名前からして、彼女は、遊里の女たべく、運命づけられているのだ。初代杵屋六翁の長唄「松の緑」にも詞われているように、それは、「禿」に多い名前であった。

関良一は、「たけくらべ」を論じた稿の中で、「やがては遊女とすることを運命づけられ、『お職を徹す』『姉の（大巻の）跡つぎ』と予想され、期待され、卑しめられており、それゆえに禿に多い『美登利』という名を与えられている少女」という表現で、彼女をとらえている。

しかも、先に引用した彼女の描写の中で、美登利は、「こゝらあたりにも多くを見かけぬ」ほどの高い「ぬり木履」をはかされていた。朱、或いは黒に塗られた高い木履は、「こんなものは難岐らしくて良家の子女には相應しからず」とされている。女主人公の美登利は、作品世界に登場したその最初から、将来は、遊廓の女として春を露ぐべき数々の「徴」を身に帯びさせられ、但し、本人だけはその「徴」の意味を何一つ知ることもなく、余念なく

「大音寺前」の「子どもの時間」を楽しんでいたのである。

① 倉橋にとっての「美登利」

ところで、倉橋は、この美登利に、どのような接近を示しているのだろうか。彼は、先ず、物語の主要人物として「美登利、信如、正太郎」の三名を挙げ、「美登利」からその紹介を始めている。すなわち、本文の「解かば足にもとくべき……」から「身のこなしの活々」までを引いて、「すべてきびきびとした女の子」と位置づけ、「朝湯の帰りに首筋白々と手拭さげたる立姿」が似合うような、早熟な娘として把握する。その後、ゴム鞆のこと、芸人を呼びとめることなど、彼女の行状のあれこれを紹介しながら、「遠慮・がまん・ひかえ目という類の語は美登利の字引には見当たらない。家庭の躰などということは愚か、何一つ心の訓練も受けたことのない気まま娘、女か男かわからない振舞のみである」と結ぶのである。倉橋の意識には、「勝ち気」で、「お転婆」で「男まさり」の少女として、美登利が登場してきた、というこゝたになろう。

ここで注目させられるのは、本文を引用しながら「美登利」をまとめ上げていくときの、倉橋の筆の運びである。「解かば足にもとくべき髪」とか、「色白に鼻筋とほりて」など、次々と描き出される美女の絵姿を、倉橋はあっさりと言ひ流し、「すべて

きびきびした」という性格の特色をそこから引き出そうとする。

また、美登利にとつて男というものが「さつても怕からず恐ろしからず」と映じていた箇所を引きながら、「女の友達は素より男の子の遊び仲間にもわがままを立て通し^{(*)11}」と解説して彼女の負けん気を強調し、先に引いたように、「男まさり」で、「お転婆」な少女の像へと結論づけていくのだ。あたかも倉橋の網膜には、この魅力的な美少女が、専ら「おきちゃん」で「放胆」なその個性においてのみ、像を結んでいたと言いかのようである。

但し、次の箇所だけは、明きらかに、彼の視線が、少女の容姿に注がれている。すなわち、「朝湯の帰りに首筋白々と手拭さげたる立姿」に向けられる彼のまなざしである。倉橋は、そのような「立姿」が「似合う^{(*)12}」とは、「年にしてはませた方^{(*)13}」であると言っている。然し、この部分は、現在の美登利の描写として読まべきであろうか。むしろ、そのような「立姿を、今三年の後に見たしと廊がへりの若者は申しき」と一続きの文として読むべきではないのか。つまり、遊びが果てて呆けた気分の若者たちが、幾分、漁色的な眼でとらえた「美登利の将来」なのだ。若者たちは、三年もすれば、この美少女は、間違ひなく紅燈の巷に夜を生きる女となっているであろうと予測し、それを無責任に楽しんでいたのであろう。そのゆえの「朝湯の帰り」であろうし、また、

そのゆえに、それは、小学生である彼女の生活からは遠すぎる。

にもかゝわらず、倉橋は、そこに、現在の美登利の「湯上りの白い首筋」を見てしまった。このとき、美登利という「おきちゃん」で「男まさり」の少女は、ほんの一瞬だけ、倉橋の前にその美しい絵姿をちらつかせ、白く細いうなじに象徴される「女のもろさとはかなさ」を、そして、そのゆえの「たまゆらの美しさ」を、鮮烈に彼の心に焼きつけてしまったのではなかったか。

こうして、倉橋のまなざしは、男まさりの利かん気な、美登利の個性を見ながら、その視野の片隅では、東の間にうつろう女の美しさとあわれさを、素早くとらえてしまっている。従って、彼は、美登利の紹介を次の文章で結ぶのだ。「そのお転婆な男まさりがいつまでもそのまま続くであろうか^{(*)14}」と。

倉橋の前で、美登利は、その相反する二つの性格のゆえに、一きわの輝きを放っているように見える。すなわち、男にも負けず、男の子たちと対等につき合い、時にはリードさえする「男性性」と、白いうなじに象徴される「女性性」の二面である。彼女は、未だ、性の分化を迎えない、両性具有的存在なのだ。

考えてみれば、美登利という少女は、あらゆる点で、両義的に造型されているとも言い得る。例えば、彼女の結っている「箱熊」は、かつては娼妓の髪形であったが、明治二五、六年頃から一般

に流行し、本文にもあるように、「良家の令嬢」も好んでする結髪であった。従って、髪形に関しては、「良家の令嬢も遊ばざるゝぞかし」と断り書きがついているように、彼女は、普通の少女の列に並んでいる。然し、先にも述べたように、彼女は、「こゝらあたりにも多くは見かけぬ」高いぬり木履を得意気に履いて、常ならぬ女であることを証していた。要するに、彼女の容姿は、良家の子女と同じ清純な少女のそれでありつつも、遊里の女のそれでもある。

また、遊女の姉を恥じるどころか、逆に誇りに思うという非現実性に生きながら、一方では、小使い銭をまきちらして人気女王の座を維持するという点では、まさに、現世的通俗性の申し子であり、この意味でも、彼女は両義性を附与されている。

加えて、信如という異性に対して、彼女の中に芽生えた淡い恋情は、明きらかに二つの極の間を揺れ動いて、彼女を引き裂くのだ。倉橋は、その経緯を、次のようにとらえて見せる。「これは程経た後のことであるが、秋雨の夜を、例の筆屋の店に正太郎その他の友達と遊んでいる時であった。信如が店そとまで筆買ひに来て、内の集いに足ひきかえして帰っていったのを、『嫌やな坊主ったら無い、屹度筆か何か買ひに来ただけれど、私たちが居るものだから立聞きをして帰ったのであらう……嫌やな奴め、這

入って来たら散々と窘めてやる物を」と口にはけんどんに言いながらも、『帰ったは惜しい事をした、どれ下駄をお貸し、一寸見てやる』とくぐりから顔を出して、『四五軒先の瓦斯燈の下を大黒傘肩にして少しうつむいて居るらしくとほ／＼と歩む信如の後かけ』を、『何時までも、何時までも、何時までも見送』って、『美登利さん何うしたのと、正太郎に怪し』まれた、その美登利の心の底には何がある。』と言うように。

もっとも、倉橋は、美登利のこんなありようを、両義のとらえるのではなく、『表出と内心とが全く反対な出方になる』と見なし、『極端に内気な子にも、極端な勝気な子にも得てありがちな通有性である』と解説している。つまり、二つの相反する感情の間を、彼女が揺れ動き、引き裂かれていると見ずに、子どもに特有の表現の問題として処理するのだ。

にもかかわらず、彼は、最終的には、美登利の想いを「時雨にぬるる紅入り友仙のいじらしさ」で象徴させようとした。とすれば、『男まさり』で『負けん気』の彼女が、楯の片面であり、雨の中で鼻緒を切らして難渋する信如のために、紅友禪の一片を握りしめたまゝ、近寄りもならず付んで、涙を含んだ瞳でその後姿を見つめる美登利の姿は、楯のもう一つの面だと言うことにならる。倉橋の中で、彼女の恋は、やはり、その両義性において把握

されていたのであろう。

こうして、両性具有的かつ両義的存在である美登利の上に、ある日、「女のしるし」が与えられ、以後、彼女は、単一の性の下に生きることを余儀なくされる。それは、美登利にとって「子どもの時間」との訣別なのだが、同時に、「子どもの時間」を封じ込めたこの物語の終りの時でもあった。千束神社の祭礼で幕を開けた物語は、大鳥神社の酉の市と共に、その幕を降ろそうとしている。すなわち、美登利はその日、始めて結わされた「島田」のかけに面を俯せつゝ、「お酉さまは諸共に」という正太との約束も反故にして、家に閉じこもってしまう。彼女の上から、「人形と紙雛様とを相手にして飯事ばかりして居る」^{(*)20} 気楽な子ども時代は、永久に去っていったのであった。

そして、一輪の造花が美登利の住居の格子門に差し入れてあった霜の朝、信如もまた、「何がしの学林」^{(*)21}に入学すべく、「大音寺前」を後にしていく。物語の幕は、ここで完全に降ろされたのである。然し、読み手のまなざしは、幕の彼方に、一人の女の後姿を透視しようとする。それは、水仙の造花を片手に、おはぐろどぶを越えて廊の中へ歩み入る幼い遊女の絵姿なのだ。

倉橋の瞳に、このうつろいの前の一時が、そして、同時に、大人へと関門をくぐっていく少女の健気な姿が、限りなく美しい

ものと映じていたであらうことは、想像に難くない。彼は、美登利の急変に戸惑う周囲の人々の噂を引用しつつ、次のように説くのである。すなわち、「人は怪しがりて病ひの故かと危ぶむもあれども母親一人は々笑みては、今にお俵の本性は現はれます。これは中休みと子細ありげに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はれず、女らしう温順しう成ったと褒めるもあれば折角の面白い子を種なしにしたと誹るもあり」この心的激変に対する、傍觀者の感想もまた長々しい、気のきかない科学的説明よりも、この短い辞句の中に尽されている」と。

倉橋もまた、美登利の「女らしい成長」を認めつゝも、「折角の子ども時代」を愛惜していたのであろう。

② 「娼婦性」と「処女性」

美登利の母が子言したように、彼女の「中休み」は間もなく終り、持ち前の「負けん気」がよみがえるのも、遠い日のことではあるまい。然し、その時、彼女の「細く清しい」声や「活々した」身のこなしが、「筆屋」の店頭に見られないのは確かである。彼女は、もはや、「大音寺前」の「遊び空間」とは、無縁的存在なのだ。

美登利は、常日頃、誇らし気にくり返していた。「姉は大黒屋の大巻」であり、「大巻の居すば彼の楼は闇」^{(*)23}である、と。そし

て、今度は、彼女自身が「大黒屋」を支えて、己れの肉体を犠牲に供さねばならない。美登利の幼い視線に、無上の価値と見えた遊女のなりわいとは、畢竟、肉体を売る賤業であり、人にさげすまれ、石をもて打たるゝ者であった。子ども仲間でさえも、時には、将来の遊びの対象として、好奇の眼を向けられることもあったのである。身に刻まれた「負印」に、気付かなかつたのは、一人、当の美登利だけだったと言うことであろうか。彼女の「子ども時代」の輝きが、一きわの鮮かさで胸に迫るのは、この所似であろう。

ところで、倉橋は、先に触れたように、この少女の名前を、教え子たちの同窓会名として選んでいる。彼にとって、「美登利」とは、彼の青春を彩る「忘れ得ぬ女性」、あえて言うなら「永遠のアニマ」だったと言うのだろうか。

文学作品などで、「永遠のアニマ」が、娼婦の形をとって現われる例は、必ずしも珍しいことではない。「罪と罰」のソーニャなど、その好適例であろう。肉体を売る娼婦の生は日常的秩序の中に位置づかず、「人非人」の「徴」を身に帯びて生きねばならない。そして、その無惨な生きざまのゆえに、逆にその「負の属性」が「正」に転化されて、「救済者」の役割をになわされるのであろう。「賤しい女」という蔑視は、彼女たちの身にされる

た一種の聖痕なのである。「聖遊女」というパラドックスが生まれる所似は、こゝにある。

倉橋は、この「聖遊女」に「永遠のアニマ」を見た。しかも、美登利の場合、その「娼婦性」は未だ肉体に現前せず、聖らかな「処女性」に覆われている。己れを開いてその肉体にすべてを受け入れ、「救済者」として機能する「娼婦性」を内に宿しながら、物語の美登利は、未だ汚れない処女のまゝに、聖らかに輝いているのだ。

倉橋が、保育者の団体名に「美登利」の名を冠した秘密は、或いは、このあたりに潜んでいるのかも知れない。保育者とは、己れを開いてすべてを受け入れる「女の性」を、清潔さの中に溶かしこんで生きる、そんな存在であると言うのではなからうか。

そして、倉橋のこの命名の背後には、明きらかに、彼の活躍した大正という時代の精神が呼吸づいている。すなわち、それは、人間の中にあるエロスの側面に、かげりのない光を当てていこうとする新しい文化の息吹きなのである。(つづく)

* 1・2・3・4・5・19・20・21・23 樋口一葉「たけくらべ」角川文庫版
* 6 関良一「たけくらべ」の趣向「解釈」第一六巻第五号
* 7 藤沢衛彦「明治風俗史」「たけくらべ」研究より引用
* 8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・22 倉橋惣三「一葉女史の小説に現われたる子供」倉橋惣三選集第四巻所収